

1 クロ物語

1

長野県の山の中の、小さな駅でした。

汽車が動きだしました。

「では、さようなら。」

わたしは、まどからおじぎをしました。

汽車は、しだいに速力を増して、見送りの人の顔が、みるみるうちに小さくなっていきます。

そのときです。ワン、ワン、ワン、ワンという声が聞こえてきました。

クロです。

汽車の後を追って、まっしぐらにかけてきます。が、ぐんぐんと残り残されて、たちまち、二、三百メートルもおくれてしまいました。それでも、かけてきます。やがて、ぽつんと黒い点になり、見えなくなってしまいました。

わたしは、汽車のまどから首を出して、いつまでも線路の上を見つめていました。

クロの鳴き声が、耳の底に残ってはなれません。

クロは、まだポケットの中に入る子犬のころから、わたしが1年間かった犬です。

クロは、その名のとおり、真っ黒い犬でした、秋田犬の血統だということで、耳は、ぴんとするどく立ち、おは、くるんとまき上がっていました。

わたしは、クマがりを使うつもりで、近くに住む、かりゅうどの安じいさんやすにしこんでもらっていたのです。そのうちに、わたしは、仕事のつごうで、長野県から千何百キロもはなれた鹿児島かごしま県のほうに移らなければならなくなりました。

「ね、だんな、九州なんてクマのいない国に、この犬を連れていってしまうのは、おいしいにな。わたしに預けていきなせいよ。クロは、すばらしいクマ犬になりますかなむし。」

と、しきりに安じいさんがすすめるので、

「じゃあ、また、冬の休みにでも帰ってきて、クマがりをするこゝともあろうから……。」

と、わたしは、安じいさんのところにクロを残しておくことにしたのです。

いよいよ出発のとき、安じいさんも、クロを連れて、見送りに来てくれました。

ところが、わたしは、人々へのあいさつや、出発のごたごたにまぎれて、つい、クロのことなどわすれていたのでした。

そうしたおり、あとをしたって、汽車をどこまでも追っかけてくるあのすがたを見せつけられて、わたしは、すっかりむねを打たれてしまいました。

わたしは、クロに、すまないことをしてしまったような気がしてたまりませんでした。

2

鹿児島県に着いて20日ばかりすると、安じいさんから、手紙が来ました。

それは、となりの家の4才になる子どもが、かぜをひいて3日ねたということから始まり、うらの畑にナスのなえをいく本植えたということ、四、五日前の大雨で、どこの池のコイが、どのくらいにげたということまで、村の20日間のことを、まことにくわしく書いている手紙でした。わたしは、元気な安じいさんのすがたを思いうかべながら、楽しく読んでいきました。

ところが、終わりになって、わたしの心は、急に暗くなってしまうました。

「クロは、おまえ様が出発してから、毎日、午後の4時から8時ごろまで、あの駅のさくの所に立って、待っておりますのな。犬ながら、感心なやつであります。

おまえ様と同じように、わたしにもなつくかどうかと、心配しているのでありますがなむし。」

雨に打たれて、しつぽをだらりとたれ、帰らぬ主人をいつまでも待っているクロ。暗い夜道をとことことかけて、新しい主人のところにさびしく帰っていくクロ。——そのすがたが、目の前にはつきりうかんできました。

——そんなふうなら、こっちに連れてくればよかった。

と、わたしはこうかいしました。

よく日、わたしは、町に出てブタの塩づけをかうと、「これをクロにやってくれ。」という手紙をつけて、安じいさんのところに送りました。

それから後も、ときどき、犬のすきそうなものをとどけましたが、クロのさびしそうなようすを聞くのは、なんとなく心がとがめられるような気がするので、できるだけ、手紙には、犬のことを書かないようにしておりました。

そのよく年の冬のことでした。

安じいさんから、例の地方ことばの交じった手紙がとどきました。その手紙には、クロのことが、こんなふうを書いてありました。

「クロは、すっかり、わたしになつきましたにな。この

間、キジがりに行きましたので、クロはじゃまだと思い、なわでつないでおきましたのな。ところが、5里ばかり先のとうげの茶屋で、昼飯を食べておりますとなむし、クロめは、なわをかみ切ったとみえまして、首になわの切れっぱしをぶらさげて、息をせかせかやってなむし、えらい勢いでかけつけてきましたのな。そして、わたしを見つけると、とびついて、手をなめる、かたをなめる、顔をなめるで、大喜びでありました。クロも、もう、わたしを主人と思いこんで、心からなつきましたによって、ご心配は無用でござりまする。」

クロが新しい主人に心からなついたというこの便りに、わたしはほっとしました。が、いつぼうでは、やっぱりちくしょうだなあ、というような、さびしい気持ちを感じたのでありました。

その後、いつとはなしに、クロのことはわたしの心から消えていき、安じいさんからの手紙にも、クロのことは、だんだんなくなっていきました。

3

クロと別れて、早くも5年の月日かたちました。

安じいさんから、「今年は、めずらしくクマがさわぎます。この冬は、帰省されてはどうですか。」という意味の手紙が来ました。

5年も故郷きょうに帰ってみないし、用事も少しあるので、

冬休みを利用して帰ることに決めました。

久しぶりに、故郷の土をふみ、なつかしい思いで改さつ口を出ました。すると、六、七才の子どもをはわしたような大きな犬が、いきなりとびついてきました。

クロです。

なんとまあ、大きくなったことでしょう。

5年間も、わたしをわすれずにいてくれたのです。

「こらこら、だんな様の洋服がよごれてしもうぞ。」むかえにきてくれた安じいさんが、大声でしかりつけました。

クロは、きまり悪そうにおをたれて、安じいさんの後ろに行つて、小さくなってしまいました。それは、いかにも、安じいさんをほんとの主人と思ひこんでいるかのようにでした。

わたしの家は、学校の先生に貸してあるので、安じいさんの家にとまることにしました。

よく日、安じいさんは、わたしにごちそうするんだと言って、クロを連れて、うら山へキジがりに行きました。出かけるとき、わたしは、ちょうどえん側に出ておりましたので、

「おい、クロ。」

とよびとめました。クロは、ウウウ、と、あまえた声で

わたしに近づき、二、三度、わたしの手のひらをなめました。じいさんが口ぶえをふくと、おをふりふり、わたしを置き去りにして、じいさんの後についていってしまいました。

わたしが初めの主人であるのに、クロは、わたしのほうを第二にしている。わたしは、なんとなくもの足りなく思いました。

しかし、また、わたしが世話したのは一年だけで、後の5年間は安じいさんが世話をしたのですから、やむをえないこととも思いました。

4

ここに着いてから5日めに、いよいよクマがりをしました。

8キロほどおくにクマが出たというので、わたしたちは出かけました。

行ってみると、雪の上に大きな足あとがありました。クヌギがねじ切られています。クマが、じゃまになる木をたたき折って通ったとみえます。

クロを放してやりました。

クロは、足あとをかぎ、それから、鼻を空に向けてひくひくさせていたかと思うと、いきなりかけだしました。

わたしは、見晴らしのきくおねの岩の上に立ちました。

安じいさんは、わたしと反対側のおねにじんどりました。わたしと安じいさんとのきよりは、三百メートルばかりありました。

こうして、クロが、この谷間へクマを追いこんでくるのを等っていました。

昼近くなっても、クロは、すがたを見せませんでした。わたしは、雪の上にすわって、冷たいにぎり飯を食べ始めました。

すると、ワン、ワン、ワン、ワン、と、クロのはげしい鳴き声がしました。

飯どころではありません。わたしは、じゅうを取って立ち上がりました。

バリ、バリ、バリ

えらい音です。

真っ黒いやつが、わたしから十二、三メートル先に現れ、谷に向かってかけ下りていきます。

意外なところから急にとび出されて、わたしはあわててしまいました。

カーン

クマの後ろから、一発、ぶっ放してやりました。

かすりきず一つ負わすことができなかつたとみえます。

クマは、谷を横切ってどんどんにげていきます。

カーン

安じいさんのつつ口から、うす青いけむりが、もこつととび出しました。

「おうい。」

わたしはさげびました。

「ワッハッハッハッ……。」

安じいさんの大きなわらい声が、流れてきました。

クマは、急所をやられたとみえて、もんどりうって谷底へ転げ落ちました。

5

安じいさんは、た、た、た、と、おねから谷間にかけて下りていきました。わたしは、こちらからゆっくりと下り始めました。

「あつ。」

思わず、わたしはさげびました。

安じいさんが、クマのそばにかけ寄ったとき、死んだとばかり思っていたクマが、むくんと起き上がって、じいさんに組みついたのでした。

不意をおそわれたので、さすがの安じいさんも、どうすることもできません。そのまま、クマにかかえられてしまいました。

わたしは、クマにつつ口を向けましたが、安じいさんまでうってしまいそうです。手のくだしようがありません。

そのときです。クロが、いきなりとびついて、クマのせなかにかみつきました。

クマはおこって、安じいさんをつき放し、クロをそのつめにかけて、投げ飛ばしました。

わたしは、そのしゅんかん、クマの頭をねらって、カーンと、たまをうちこんでやりました。それでクマはまいてしまいました。

安じいさんのきずは、たいしたことはありませんが、クロは、クマのつめでむねからはらへかけて肉をひきさかれ、雪の上にくったりとのびてしまいました。

「おお、クロ。」

安じいさんがだこうとして手をかけると、クロは、きずのいたさにたえられないのでしょうか。ウウウ、と、すごいうなり声を上げて、かみつこうとしますのです。どんなにしっかりつけても、すかしても、自分の体に手をふれさせようとしません。

「クロ、どうした。」

わたしは、そのそばにしゃがんで、声をかけました。クロは、もの悲しげなひとみで、わたしをじっと見上げました。

「おい、クロ。」

もう一度声をかけると、クロは、その重いきずの体をわたしのほうに寄せてきて、わたしのひざの上に頭をのせるのです。

「おお、よしよし。」

わたしがクロをだき上げると、そのきずがひどくいたんだのでしょう。ウウウ、とうなりました。そして、わたしのうでを、その齒の間にはさみました。しかし、クロは、わたしにかみつこうとはしませんでした。

クロの心のおくには、最初にかったわたし一人だけが、ほんとの主人としてきざみつけられていたのでしょう。わたしのうでの中で、じいっといたさをこらえているクロのすがたを前に、わたしは、目がしらがじいんと熱くなっていくのを感じるのです。

その後、クロのきずは、すっかりよくなりました。そして、わたしは、クロをもう手放すまいと、鹿児島まで連れてきました。

この話を書いている今も、クロは、わたしの子どもといっしょになって、庭をとびはねて遊んでおります。

むく はとじゅう
(掠 鳩十)

词 汇

みるみるうちに	[副]	眼看着
まっしぐら	[副]	勇往直前
ぐんぐん	[副]	迅速地,有力地
ぽつんと	[副]	孤零零地
首を出す くびを だす	[词组]	伸出头去
いつまでも	[副]	到什么时候都
ぴんと	[副]	突然跳起
するどい	[形]	敏锐
お	[名]	尾巴
くるんと	[副]	团团转
クマがり クマ狩	[名]	猎熊
かりゆうど	[名]	猎人
しこむ	[他五]	训练
いきなせい=いき なさい		去吧
ごたごた	[名]	混乱
まぎれる	[自一]	由于忙碌而忘怀
おり	[名]	时候
したう	[他]	追随
むねを打つ むね をうつ	[词组]	感动,打动心弦

さく	[名]	栅栏
あります	[动]	相当于あります
なつく	[自五]	(小孩对周围的人) 亲密
しっぽ	[名]	尾巴
たれる 垂れる	[自一]	垂下
とことこ	[副]	小步快走的样子
こうかいする 後 悔する	[自]	后悔
とがめる 咎める	[他一]	责备
~め	[接尾]	小子,家伙
ぶらさげる	[他一]	悬挂,提
せかせか	[副]	慌慌张张
によって	[词组]	随着
ほっとする	[自サ]	放心
ちくしょう 畜生	[名]	畜生
いつとはなしに	[词组]	不知什么时候
さわぐ	[自五]	吵闹
なんとまあ	[感]	(表示吃惊)真是 的,哎呀
しかりつける	[他一]	严厉训斥
きまり悪いきまり	[形]	不好意思,害羞
わるい		
えん側 えんがわ	[名]	檐廊
呼び止める よび とめる	[他一]	叫住

ふりふり	[副]	摇
ものたりない	[形]	不能令人十分满意
やむえない	[连语]	不会有 不能有 不 得不……
いよいよ	[副]	终于
クヌギ	[名]	栋树
ねじきる	[他五]	扭断
見晴らす みはら す	[他五]	眺望 远望
おね	[名]	山脊
じんどる	[自五]	占据位置
かすりきず	[名]	擦伤
つつ口 つつぐち	[名]	枪口
もこ	[形动]	模糊
もんどり	[名]	斤斗
むくん=むくむく	[副]	忽地起来
組みつく くみつ く	[自五]	揪住
ひきさく	[他五]	撕开 衡破
ぐったり	[副]	精疲力竭
うなり声 うなり ごえ	[名]	呻吟声
あげる	[他一]	放出声音
すかす	[他五]	哄
きざみつける	[他一]	铭记, 牢 Z

じいっと = じいん [副]	疼痛钻心, 热乎乎
と	
こらえる [他一]	忍受, 忍耐
目がしら めがし [名]	眼角
ら	
とびはねる [自一]	跳跃

语法, 词语说明

1. ...てはなれない

(クロの鳴き声が、耳の底に残ってはなれません。)

挥之不去

後ろにぴったりついてはなれない。

紧跟在后面不离开。

2. ...てもう = てしまう

(この犬を連れて行ってしまうのは、おしいにな。)

一种遗憾的心情

このような木は秋になると、葉が落ちてしまう。

这种树一到秋天叶子就落掉。

3. ...をなめるで

相当于“~をなめて”

4. ござりまする

相当于ございます

むし

(クロは、すばらしいクマ犬になりますが大むし。)

相当于“ね”

のな

(クロはびやまだと思い、なわでつないでおきましたのな)

相当于のね

はわす

はう的使役态

学生に新聞を読ませます。

让学生读报纸。

いかにも...ようだ

(それは、いかにも、安じいさんをほんとの主人と思ひこんでいるかのようでした。)

确实

彼はいかにも困ったような様子をしていた。

他显出很为难的样子。

まい

(私は、クロをもう手放すまいと、鹿児島まで連れてきました。)

不打算, 不想

もう何も言うまい。

以后什么也不想说了。

小黑的故事

1

长野县山里的一个小站。

火车启动了。

“再见了。”我从车窗里向大家鞠躬。

火车逐渐加快了速度，送行人的面孔逐渐变小了。

就在这个时候传来了“汪汪”的声音。

是小黑。

小黑跟在火车后面，一个劲地跑。但很快它就被落在后面，一会儿就有两三百米了。即使这样，它还在跑。不久，它变成了一个小黑点，渐渐地看不见了。

我从车窗探出头去，一直在看着后面的铁路线。

小黑的叫声，在耳边回响，挥之不去。

小黑是从能放进口袋里那么小就开始养的，我养了一年。

小黑就像它的名字一样，浑身乌黑发亮。据说是秋田犬的血统，两耳直挺挺地竖着，尾巴向上翘成一圈。

我本打算猎熊的时候用小黑，就请住在附近的猎人安大叔训练它。这期间，由于工作我又必须迁到距长野一千多公里的鹿儿岛去。